人とちがっていいんだよ

東金町小学校　二年　菊地原　凛

書名「ライオンのくにのネズミ」

著者「さかとく　み雪」

わたしは、友だちと同じ言ばで話し、体の大きさもほぼかわらない、同じだ。男の子、女の子かんけいなく、スポーツもするし、じてん車にだってのれる。それがわたしにとっての「ふつう」だ。だから、わたしは考えてみた。「ふつう」って何だろうと。

ライオンの国に来たネズミは、言ばもわからないし、体の大きさもライオンとはまったくちがい、とても小さい。ともだちになったリスの国では、女の子はスポーツをあまりしないし、じてん車にものらない。

わたしは、この本を読んでいろいろな国があり、国によって「ふつう」はちがうことに気づいた。ネズミは、体が大きいライオンに食べられてしまうかもしれないと思って、ふあんな気もちでまい日をすごしている。わたしもほかの国に行ったら同じ気も

ちになるかもと心ぱいな気もちになった。
せんそうのある国からきたリスは、サッカーが出来なくてライオンたちにわらわれてしまった。
出来ないことがあってもいいのに、わらうなんてひどいと思った。わたしもうんていが出来なくてわらわれたことがある。くやしくてぜったいに出来るようになりたいという気もちになった。そしてたくさんれんしゅうをした。やったことがないから出来ないのはし方がないし、わらうことではない。
だから、友だちのリスのために、
「リスをわらうな。」
と、さけんだネズミはゆう気があって友だち思いだと思った。言ばは通じなくても、ネズミの気もちがちゃんとライオンにつたわって、わたしは、うれしくなった。
わたしは、「ふつう」とは、人によってちがうということに気づいた。じ分とほかの人がちがっていても、それは当たり前だ。わたしも、これから新しい友だちと出会ったときは、どんな子なのか、どん

な気もちなのか、知ろうとすることからはじめたいと思う。（原文ママ）